

発言要旨 松本市農業の課題解決プラットフォーム 第1回コア会議

【横山氏】十数年程前の調査で今井地区に 60ha の荒廃農地を認めた。以来里親制度を活用して市外から新規就農者を迎え、荒廃農地の解消に努めている。地区の若い担い手は減少している。60 歳以下は全体の 20%しかいない。補助金を無駄にしないためには若い人に投資することが重要。若者から見て魅力のある農業とは、IT 化、デジタル化。農業は家庭内継承が主体で、経営に関して親の考えを子に押し付ける旧態依然とした農業が存在。これでは展望が開けない。

【梶原氏】松本は広く、地域間で農地の特徴が異なる。中山間地の四賀は畑が狭く、大規模化できない。集約化しても獣害がある。野菜だけで中山間地を耕すことは無理。可能性があるのは放牧。特色ある肉の生産ではないか。牛、豚、羊、鶏。将来、日本で肉が普通に食べられない時代が来るのではないか。

【三宅氏】まずは人をいかに呼び込むかということが重要。中山間地の粗放的な農業に対して大学のノウハウを活用できれば。

【宮原氏】地域で作った農産物が地域内で流通していない。例えば下原のスイカは、ほとんど県外へ出荷。地域の産業がサプライチェーンで繋がり、お金が回る仕組みが考えられないか。

農業は景観保持や獣害防止のバッファゾーン（緩衝地帯）としても機能している。

【高野部長】松本市は広く、様々な農業が展開されている。どのようにしたら新規就農者に来てもらえるのか。

【長谷川課長】水田地帯と果樹地帯は何とか維持できているが、中山間地は課題が多い。人がいなくなると集落が維持できない。

【柳澤氏】地産地消、エシカル消費を推進する「しあわせバイ信州」キャンペーンが 10 月から始まった。今、中山間地で働く農業者の平均年齢は 80 歳を超えるのでは。

山林に返すという考えもあるが、折角ある農地を有効活用するには、粗放的な管理で農地をある程度まとめて家畜の放牧に使うという考えはどうか。もちろん生産物に対する需要、チーズや肉などを活用する業者がいるか、放牧に伴う糞尿が自然に与える影響等、いろいろな課題を評価して。飼料となるソルガムなどもそこで生産。観光資源としても活用できる可能性がある。

【横山氏】放牧を誰がやるのか。事業としてどのくらい収益性があるのか。餌やり、冬場の管理などもある。検討部会を作って具体的に考えることが必要。

今井地区は中山間地と比べて恵まれているかもしれない。若い人に来てもらうには他の産地と差別化を図り、ITなり進歩した技術を駆使して、新しい農業の姿を見せるために思い切った考え方やPRが必要。

今までの議論で抜けているのは、収益性、儲かる農業という視点。高収入を得るためにどのような作物を選択し、その流通、販売まで、地域の商工も一緒になってそのシステムをシュミレーションすることが大切。

【柳澤氏】農業の収益性に関して、松本市の農業者に関するデータはあるのか。

【長谷川課長】現在、松本市の農業産出額は210億円で、1戸当たり産出額としては341万円、5年前（平成27年）は258万円で、米から果樹等の収益性の高い作物に移行が進み、農家の所得の向上につながっていると思われる。

【横山氏】農業と言っても専業なのか兼業なのか。一くくりにすると参考にならない。専業農家のこの分野の収益性とか。コメ農家はこのくらい、果樹農家はこの程度など。畜産は億単位のお金が動く。果樹は100万から1000万単位。

【梶原氏】農ある暮らしにあこがれる人はいるが、土台になるのか収支・収益性。専業一本で家族を養えることを基本とするべき。

【横山氏】私が受け入れた弟子11人中8人が松本で生活しており、みんな土地を買って家を建てている。それを見てまた新人が入ってくる。今、毎年3~4人面接をして農業研修生として受け入れている。儲かる農業。ただ、今は全国で新規就農者の争奪戦が始まった。他の産地では更に上の取組みを行っているところがある。

【柳澤氏】松本にはいろいろな農業の形態があり、一概に議論はできないが、専業農家として家族が食べていくにどのくらいの収入があればいいのか、手元にデータがあれば示してほしい。

30~40haの水田農業を行っている安曇野市の先輩は、息子が農業を継がないという。トラクターとかコンバインを買換えるために仕事を続けているという印象から。規模拡大をすればいいということでもない。

課題は家族経営の限界ということ。昭和の農業。古い考え方の農業からの脱却。もう少しスマートな技術を使いながら経営するという方向。

【宮原氏】家族経営主体の農業の中で、成功モデルが近くにないと取り組みにくい。

いろいろな会社などで既にテクノロジーが確立されている。なぜ農業現場に普及しないのか。当たり前に使われているIT技術などを農業の分野に入れていくためには人材育成の面からも必要。

【横山氏】単純な答えは親と子の経営を分離すること。親という障壁がなければ新たなことに積極的に取り組める。ただ現実には親の金を頼らないと農業ができない。市や地域に若者へ投資することへの理解が広がれば、新しいイノベーションが起きてくるのではないか。もちろん、親世代が積み重ねてきた経験も大切だが。

【柳澤氏】一番の問題は資金。家族経営の限界ということ。確かに親と子の経営を分離できれば、見えてくる景色が変わってくる可能性がある。

宮原さんから地域全体でお金が回る仕組みづくりという提案があったが、長野県や松本地域ではこの考え方が弱いのか。

【長谷川課長】松本の農業は高品質な農産物を生産して大消費地に高く売る農業が基本。ただ、現在は直売所があちこちできて地元の農産物が入手しやすい環境が整ってきた。十分かどうかは別だが。

【横山氏】宴会で出るフルーツが実は地元産ではなかったりする。価格の高いものは地元で選ばれないという。地産地消の考え方はいいが、それなりにお金を出してもらうことが必要。

【梶原氏】地元の方は、野菜や果物をもらって当たり前と思っている。地元消費者への啓蒙活動が重要。高齢の方は半分年金で食べているので、あまり農業収入を追及しないのでは。ヨーロッパでは政府が有機農産物に補助金を出して一般の農産物と同様の価格でみんなが買えるようにしている。こちらでも地元農産物の消費を行政が補助金で支える仕組みがあればいい。

【宮原氏】国民に食を提供するための農業と、農家が食べていくための農業を区別して考える施策が必要。また、エシカルな消費行動を追及するため、取れ過ぎた農産物や食品ロスの部分に価値を付けることが必要。一番考えられるのは加工して別の付加価値を付けること。ビールにフルーツ果汁を加えるなどの事例がある。

【横山氏】ロスの部分は農業収入の底上げにはなるが、高収益を得られる強い農業に繋がるのか。個人のレベルで加工品などを百貨店においてもらうには、ある程度のロットを確保することなどハードルが高い。

【柳澤氏】農家にとっては、ロスが発生したときに契約ベースで引き取ってもらえるシステムがあればありがたい。JAなどを見ると規格外品に対して厳しいのが現実。

【長谷川課長】松本市でも加工品の開発を補助してきたが、農家側でそれをすべてやろうとすると無理があった。農家が苦手な分野は、業者と連携することが重要。6次産業化はいろいろな人が関わることが大切。

【横山氏】ふるさと納税の返礼品として農産物をもっと強く推し進める必要がある。松本市には様々な農産物があるというが、返礼品の1位はイズミ精器のシェイバー。我々のグループ（松本農業未来プロジェクト）では来年度に向けて様々な農産物をパッケージにした返礼品の開発を進めている。

【長谷川課長】農政課でも返礼品リストに農産物を増やそうと考え、農業者に出展を呼び掛けた。ふるさと納税は市場調査の手段として活用できる。ただ、農産物は単価が低いので、付加価値を付けた加工品やセット商品の開発も進めたい。

【横山氏】、我々のチームには、カメラマンなど多様な経歴をもつ人間が集まっている。それぞれのメンバーが得意な分野を生かしてふるさと納税の返礼品開発を進めたい。

————— 休 憩 —————

【柳澤氏】これまでの議論から、次の2つにフォーカスしたい。

① お金や技術がある平坦地の比較的大きな農家、農業地帯の課題として見えてきたのは、農業経営、家族経営の限界ということ。新たなテクノロジーの理解や導入が進まないこと、親子間の経営分離や人材育成の問題。

② 中山間地の課題は、農地をどのように活用していくかということ。一つの可能性として放牧による粗放的な管理や畜産との連携。あくまでも出口を見据え、採算を考えたうえでどのような取組みができるのか。

【横山氏】もう一つ。農業者人口をどのように増やすのか。これを第3のテーマに考えてもらいたい。農業者の3割のプレイヤーの交代。交代した3割のプレイヤーがイノベーションを起こして残りの7割を動かす。松本に来たいという人は沢山いるが、住居、機械、倉庫、作業場の確保など課題が多い。その辺りのテーマを追加してもらいたい。

【柳澤氏】今の考えは、①のテーマに含まれるのではないか。「昭和の農業形態からの変革」というテーマで。ここに新規就農者の問題も入れていく。さらにIT技術の取り込みも含めて。

もう一つ、中山間地域の荒廃農地を活用は、収益性の確保が課題。それには消費側から考えることが重要で、放牧した肉の活用など事業として回っていくのか、まずは、地元のサプライチェーンを検討。

【梶原氏】中山間地のサプライチェーンや、放牧の肉を消費者が買ってくれるかという課題については、学校給食や老人施設などに、ある程度まとまった数量を率先して購入してもらうような働きかけはできるのか。そうすれば、それなりの消費量が確保できるのでは。必要な放牧頭数や放牧地の広さの計算もできる。

【横山氏】放牧する畜種は何を想定しているのか。豚なのか羊なのか山羊なのか、ジビエなのか。それによって消費行動が左右される。

【梶原氏】畜種は専門家ではないので、何がいいのかわからない。もし課題の柱になるのなら、検討部会では四賀など中山間地の放牧に適したところで、完全な放牧でなくても冬場の囲い込みで、信州大学の知見などを活用して適した畜種、放牧地も雑草を食べさせるのか、冬でも緑化が維持できる種をまくのか、いろいろな人を巻き込んで、間口を広げて専門的に考えることができるのでは。

最近出版された本で「土を育てる」というアメリカのゲイズ・ブラウン氏の著書がある。向こうは不耕起栽培が盛んで放牧も行われ、牛は雪の中から食べるものを探し、その牛を肉としていただく。アメリカ北部のノースダコタ州の寒いところでできるなら、日本でもできるはず。

【柳澤氏】現在、松本市の畜産はどんな状況か。

【長谷川課長】畜産や酪農の分野では生産者が減っている。一方、残っているところは大規模化の方向。

放牧に取り組むことになれば、細部は検討部会で議論すればいい。学校給食や福祉系施設等の食材はどうやって調達しているのか、どういうものが 필요한のか、流通や加工はどうなっているのか、様々な皆様に検討部会に集まっていたら更に議論していけば、可能性が開けるのではないか。

【高野部長】放牧そのものに焦点を当てることより、学校給食という課題があって、品質や数量の確保など一定のロットを確保する必要性に対して、ある程度市が基準を認めて導入方法を変えていくことに繋がれば、課題解決という方向に行くのではないか。

【横山氏】生坂村は農地や住宅など行政の手厚い支援を受けて山清路巨峰の産地となった。今、若いIターン者の集団ができており、JA出荷は1割の5000万円、栽培面積から約5億の生産額があるので、残りの9割は自分たちで販売。傾斜地の大きい畑、小さな畑いろいろある中で、そのぐらい活力のある産地に発展した。奈川はそばの里。中山間地の発展は様々な分野からいろいろな資料を集めて検討することが重要。もっと産業を興すことを考えたらどうか。

【柳澤氏】入山辺の傾斜地のブドウ園は、手がつかなくなっているという現状があるが、これはどのような理由からか。

【横山氏】機械の入りにくいところや、SSが転んでしまうような傾斜地は、防除が手作業で手間がかかり、若い人がやらないという単純な理由。

坪単価が高い作物に取組めば狭い土地でも収益性が上がる。放牧は最後の手段。どうにもこうにも担い手がなくて家畜に頼るというイメージ。その前に産業を興すという可能性をみんなで勉強したいと正直感じた。

【梶原氏】私がなぜ、放牧をこんなに押しているか説明したい。四賀地区の専業農家は2人しかいなくて、私も含めいずれも新規就農者。果樹の専業農家は知る限りゼロ。ぶどうを一から興すのは大変。四賀が産地間競争に加わり、既に信州の特産品となっている果物の世界に踏み込まなくてもいいのではと思う。今、家畜飼料が高騰しており、一般の人が肉を買える将来があるのかなという危機感がある。何をやってもいいなら、肉の自給率を支える放牧に着目したいという想い。

【宮原氏】私のバックグラウンドは畜産で鶏の研究。鶏はキツネに獲られるので放牧に向いていない。四つ足の動物ならいいと思う。確かに有機農業は果樹園が近くにあるとやりにくい。JAS認定も難しくなる。逆に有機農業と放牧の相性は良く肥料も自給できる。ただし牧草を食べに鹿が来るのでバッファゾーンは必要。

最近、ヨーロッパではアニマルウェルフェアという考え方が定着し、日本の畜産も変革が求められている。家畜に対して優しい飼い方の視点からもモデル的なものができるのはいいと思った。

【三宅氏】信州大学農学部には放牧に力を入れている先生がいるので、力になれるかと思う。ただ、どのような作物が市内で作られているのか、俯瞰した地図を見ながら議論できればよかった。10年、20年後は地球温暖化対策などの話が出てくる。未来の視点も含めて議論することが重要ではないか。

【柳澤氏】松本市の農業を俯瞰できる地図はあるのか。この辺は主に水田、この辺は果樹とか、資料があれば次回までに準備してほしい。

【長谷川課長】わかった。

【柳澤氏】次回は、課題別検討部会に至る内容をもっと踏み込んで検討していきたい。そのほか、最後に何かあるか。

【横山氏】農業の観光化という視点も加えてほしい。インバウンドの取り込みも含めて。うちのグループには、畑にテントを張って農業体験をしてもらうツアーを考えている者がいる。アルピコグループなど企業との連携も考えたい。

【長谷川課長】ふるさと納税の時も考えたが、農業の体験ツアーなど、様々な視点を含めて農業を活性化させる手立てを考えていきたい。